

## メールレター(38)

### 娘の着物

雪模様が続いています。暦なんて一体誰が決めたのでしょうか。地球は丸すぎて、日本では立春といえども、暦に沿って世界中のどこでもかしこでも季節が同じようには回ってはいかないようです。こちらは、芽吹く春はまだ遠そうです。

コロナウイルスが世界中に拡大し、健康を脅かしているようです。そうした中、令和天皇誕生日祝賀会が、先日、ICAO(国際民間航空機関)の建物で、日本総領事館とICAO日本代表部の合同で行われました。マダム田中は、会場を飾る生花の生け込みを担当しました。春の雰囲気を出せればと、木蓮やピンクや黄色の華やかな色合いの花材を使って生け込んでみました。

ICAOは航空関係の国連といえるのでしょうか。昨年、国連のように、代表部に全権大使が赴任されました。今までの代表部から少し格上げになったようです。そのせいもあるのでしょうか、大変ダイナミックなレセプションでした。例年の倍以上のVIP6人のスピーチがありました。ICAO代表、ケベック州観光担当大臣、モントリオール市代表、オリンピック委員会代表など、4人が女性でした。男性は、総領事とICAO大使のみでした。

この女性たちのスピーチの立派だったこと！適所にこうした有能な女性を配置できるケベックの懐の深さも感じます。ドリトル先生ですか、娘と手を取り合って、勿論、目一杯レセプションを楽しんでおりました。ドリトル先生は、何より、カナダ国歌と君が代を歌った美しい着物姿のオペラ歌手に感激しておりました。

「美しい歌声！心に染みる！」

「パパ、あの歌手が来るわよ」

娘のその言葉に、ドリトル先生は食いまくっていたお寿司のお皿を投げ出して、

「素晴らしい歌でした。一緒に写真を撮らせていただけますか」

通りかかったオペラ歌手をつかまえて、ちゃっかりと二人で写真におさまっていました。娘の姿は写真の中にはなく、撮るだけでした。

「着物を着て歌うのは大変ではないのですか。」

娘が質問。

「イタリアでは蝶々夫人を歌うことが多かったのですが、歌う時はいつも着物でしたから、慣れています。下腹に力を入れて歌うので、案外、着物でも歌えるものです。」

「下腹に力なんですね。剣道と同じです。」

話は尽きることがありません。

ドリトル先生は、オペラ歌手との撮影が終わるやいなや、幕間にさっさと会場を後にしたのでした。

マダム田中は、花よりだんご、オペラ歌手を放りだし、寿司を食いまくっておりました。今回のレセプションはお料理が豊富で、お寿司だけではなく、焼き鳥やら串カツやら、天ぷらやら、豚の角煮やらと、軽く3日分は食べたかもしれません。あの生け込みで使ったエネルギーもこれで充電できたようです。

レセプションから2日後、娘のかねてよりの念願だった、娘の夫のジョシュとの着物姿の写真撮影がありました。マダム田中は、13年ぶりに娘の振袖を出して準備することになりました。20歳で振袖を着た時が、娘がマダム田中の母親と過ごした最後の時になりました。この振袖には、娘の祖母との20年間分の思い出が詰まっているのです。

振袖を出して、マダム田中は、びっくり真っ青。13年間扱いを怠け、箆笥に眠らせておいた大きなお釣りがきたのです。着物に折皺がしっかりついていました。

「あらあーどうしよう。」

あたふたしたマダム田中は、知恵袋の妹に、お知恵拝借の緊急メールを送ったのです。知恵袋ばあちゃん(妹)のアドバイスのように、注意しながらアイロンをかけ、皺とりもできました。早朝にスタジオに入り、お化粧品や髪の設定、着付けと美しい着物姿の娘が少しずつ出来上がっていきました。ゆっくりと時が過ぎていきました。ドリトル先生はスタジオの片隅で、目を細めながら娘の着物姿に見惚れていました。お宮参り以来の数え切れない思い出が、走馬灯のようにくるくると、娘とマダム田中の頭の中で回っていました。

おっとと、娘の夫のジョシュを忘れるところでした。ジョシュは、羽織袴姿に大喜びでした。縁のあまりない習慣だけに、七五三の男の子のようにはしゃいでおりました。まあ、可愛いこと。